

## 抗ウイルス感染症研究のフロンティア

—多角的な抗ウイルス研究が生み出すシナジー—

オーガナイザー

今野翔(東京薬大薬)  
玉村啓和(東京医歯大生材研)  
三隅将吾(熊本大院薬)  
藤田美歌子(熊本大院薬)  
岩谷靖雅(国立病院名古屋医療七臨床研七)

抗ウイルス感染症研究は、新型コロナウイルスの出現とその収束に向けた各分野により目覚ましい発展を遂げた。一方、今般のコロナウイルスパンデミックにより、われわれは常に新たなウイルスの脅威に晒されていることが再認識された。多様かつ進化の早いウイルスとの終わりのなき戦いを続ける

ために、各抗ウイルス研究分野の最新研究および技術の共有は必要不可欠である。

本シンポジウムでは、“多角的な抗ウイルス研究が生み出すシナジー”と題して、ケミカルバイオロジー、天然物化学、衛生化学、ペプチド科学、大規模ゲノム解析といった様々な分野から、先駆的かつ独創的なウイルス研究を展開している演者に最新の内容をご講演いただく。本シンポジウムを起点に、演者および聴衆の双方が新しい研究視点を手に入れ、薬学における抗ウイルス感染症研究の新たなシナジーにつながることを期待する。

(今野翔)

## 創薬を志向した構造生命科学の最前線

オーガナイザー

大戸梅治(東大院薬)  
竹内恒(東大院薬)

近年、生体高分子の立体構造をもとに生命現象を理解しようとする構造生物学は新たな局面を迎えている。X線結晶構造解析および核磁気共鳴法に加え、クライオ電子顕微鏡法および高精度蛋白質立体構造予測プログラムの発展等により、従来よりも蛋白質の立体構造へのアクセスが飛躍的に向上し、あらゆる生命科学の領域において、これらの構造情報を活用することが重要になってきている。創薬においても、

構造情報を活用することで新しい作用機序に基づいた薬剤の開発も可能となることが期待される。

本シンポジウムでは、構造創薬研究を展開する5人の日本のトップ研究者を結集し、その最前線の状況を聴衆と共有することを目的とする。創薬をキーワードに、NMRを用いた動的蛋白質複合体の構造、キネティックの理解、蛋白質相互作用解析、クライオ電子顕微鏡構造解析に関して講演いただく予定である。

本シンポジウムが、薬学における構造創薬研究の発展を促す機会となることを願う。

(大戸梅治)

## AIで切り拓く未来の創薬・医療

オーガナイザー

有馬英俊(第一薬大薬)  
関嶋政和(東工大情報理工)

超高齢化社会に突入したわが国では、国民医療費の増加が課題となり、創薬や医療の分野でもデジタルトランスフォーメーション(DX)推進の取り組みが進んでいる。近年、テクノロジーの急速な進歩に伴い、生命科学情報、医療情報、身体情報などの膨大かつ多様な情報が日々蓄積している。これらDXの推進およびビッグデータの解析に人工知能(AI)の活用が期待されている。実際、この領域での成功事例も増加しつつあり、例えば、海

外では10を超えるAI創薬化合物が臨床試験または臨床試験段階であること、国内でも複数のデジタルセラピューティクスが登場したこと、数十の画像診断支援AIが実用化されていることなどが挙げられる。

このような背景のもと、本シンポジウムでは、「AIで切り拓く未来の創薬・医療」と題し、本領域の最前線で活躍している4人のシンポジストによる講演を企画した。これらの講演を通じて、AI技術が医療と創薬において新たな革新をもたらす可能性について理解し、さらなる発展の可能性について参加者の皆様と一緒に議論したい。

(有馬英俊)

## 小児用医薬品の創薬研究と

その拡充に向けた取り組み

オーガナイザー

川岸裕幸(国立衛研)  
諫田泰成(国立衛研)

超少子高齢社会のわが国では、生まれてきた生命を一つでも多く救うことが求められる。そのためには、小児用医薬品の開発・拡充が重要であり、政府が示す「骨太方針2023」でも、小児用・希少疾病用治療薬の拡充推進が述べられている。

しかし、小児用医薬品の開発では、有効性・安全性評価、製剤化、臨床試験などのプロセスにおいて、“小児という集団”であることを考慮する必要

がある。従って、小児用医薬品の拡充のためには、基礎・臨床研究のさらなる推進と共に、産官学のより一層の連携が不可欠である。

本シンポジウムでは、胎児、新生児の心不全治療に向けた創薬基盤研究に加え、小児の特性を考慮した製剤設計、小児希少疾患の臨床試験の留意点について紹介する。創薬研究から臨床試験、レギュラトリーサイエンスまで一貫した最新の情報を共有することで、小児用医薬品の拡充に向けたbench-to bedsideな研究のあり方や展望について議論したい。

(川岸裕幸)

## マイクロ・ナノプラスチック研究の最前線

—ヒトリスク評価に向けた取り組みと課題

オーガナイザー

芳賀優弥(阪大院薬)  
石原康宏(広島大院統合生命)

マイクロプラスチック(MPs)は、直径5mm以下の微細なプラスチック粒子を指し、生態系や生物への影響が懸念されている。ヒトは食物や呼吸を介してMPsを取り込んでおり、近年、ヒト体内からのMPsの検出例が報告されている。さらに、検出技術の進展により、1μm以下のプラスチック微粒子であるナノプラスチック(NPs)の存在も指摘され、MPs・NPsの環境中動態測定やヒトリスク評価が求

められている。環境中のMPs・NPsはその種類の多さのみならず、プラスチック合成には多くの添加剤が用いられ、さらに環境中で熱や光により劣化することから、その物性(サイズ、形状、劣化、添加剤など)は極めて多様である。

本シンポジウムでは、多種多様な環境中MPs・NPsについて、趣向を凝らした実験系を用いて研究している第一線の研究者にご参集いただき、環境中MPs・NPsのヒトリスクおよび現状における課題について議論したい。

(芳賀優弥)

## がん治療における薬剤師の貢献とその評価

—医療、臨床研究、教育という視点で

オーガナイザー

川上和宜(がん研有明病院薬)  
安武夫(明治薬大)

癌領域や感染領域など、多くの領域で専門薬剤師制度が設立され、各領域で専門薬剤師や認定薬剤師が誕生している。専門資格を取得するために、自分自身の知識や技能を磨くことは必要であるが、資格取得後に身につけた専門性を生かして医療現場で患者の治療に貢献することが本質である。

癌治療において薬剤師が関与すべき場面は、抗癌剤の曝露対策や入院時の持参薬管理、外来癌薬物療法等が

ある。最近では医師・薬剤師間におけるプロトコルに基づく薬物治療管理や医師の診察前に実施する薬剤師外来がある。特に癌薬物療法に対する薬剤師外来は、2024年度の診療報酬で癌薬物療法体制充実加算として新設され注目度が高い。医療現場では、より処方決定に関わる部分で、薬学的知識やスキルを発揮することが求められる。

本シンポジウムでは、医療現場で勤務経験を持つ薬剤師がシンポジストとなり、患者の癌治療に貢献している活動を会場で議論し共有する。

(川上和宜)

人を対象とする生命科学・医学系研究に関する  
倫理指針ハンドブック  
改訂版

“電子書籍版”  
も発売中!!

※ 電子書籍版はAmazon、楽天、ヨドバシドットコム、MobileBook.jp等の電子書店でご購入いただけます。

人を対象とする生命科学・医学系研究に関する

## 倫理指針ハンドブック 改訂版

令和3年3月23日に告示された【人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針】。本書は、告示、通知、ガイダンス等の生命・医学系指針に関する資料をコンパクトにまとめました。手元に置いておくことで“いつでも”“すぐに”確認が出来るので、実務だけでなく資料集として教育・研修にも活用できる一冊です。

A5判/268頁/定価3,850円(本体3,500円+税)

“令和4年3月10日告示”“令和5年3月27日告示”の一部改正と  
それに伴うガイダンスの改訂による【前版からの主な変更点】

- 用語の定義及び適用範囲の見直し
- 個人情報及び匿名性加工情報の見直し
- 個人情報の管理主体の規定
- オプトアウト手続きの見直し
- インフォームド・コンセント(IC)等の手続きの見直し
- 外国の研究機関に試料・情報を提供する場合の通知事項等の見直し

書籍の詳細は  
こちらから↓薬事日報社 書籍の詳細・ご注文はURLまたはQRコードからオンラインショップへ ⇒ <https://yakuji-shop.jp/>

当ファイルの著作権は(株)薬事日報社またはコンテンツ提供者に帰属します。当ファイル(印刷物含む)の利用は私的利用の範囲内に限られ、それ以外の無断複製・無断転載・無断引用はご遠慮ください。当ファイル(印刷物含む)を社内資料、営業資料などでご利用される場合はご相談ください。

株式会社薬事日報社 TEL:03-3862-2141 shinbun@yakuji.co.jp <http://www.yakuji.co.jp/>